金子　守恵著、『土器つくりの民族誌――エチオピア女性職人の地縁技術』、昭和堂、2011 年、299 頁、5,300 円+税

中林　那由多

はじめに

近年「もの」研究については、ものそれ自体の物質性に着目した A.アパデュライや D.ミラーらの研究、もののエージェンシーに着目し、ものともの、ものと人が媒介する関係性に着目する A.ジェルや B.ラトゥールらのアクター・ネットワーク論を援用した研究が高まりをみせつつある。また、「身体」の研究分野では、身体を社会構造の再生産の基盤と捉え、学習の場における状況論的学習や、そこで継承される言語化されない知識や技能を暗黙知として捉え、身体のふるまいを検討する実践論的な身体（技法）研究が盛んに行われている。しかし、ものと身体をむすびつける「技術」の研究については、その重要性が十分に認識されているとは言い難い。技術の人類学的研究は、モースの流れを受けたフランスの人類学のなかで続けられてきた。著者は、もの・身体・技術を総体的に捉え、日常実践に埋め込まれたものつくりとして、民族誌的記述のなかに描き出している。

内容

エチオピア西南部に居住するオモ系農耕民アリには、ものつくりに専門に携わっている、マナとよばれる職能集団がある。マナのなかでもティラマナとよばれる集団の女性は、土器を専門に製作している。著者は、職人たちから土器つくりを学び、約 2 年間にわたって調査を行った。この著者自身の土器つくりの習得過程で、「アリの職人はいったいどうやって土器をつくっているのか」という問いを根底におき、土器つくりとそれを巡る事象を検討した。その成果を 2005 年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に博士論文として提出し、それを大幅に改編したのが本書である。以下に本書の内容の要約を行う。

―目次―

第 1 章　土器をつくる身体と生活のなかにいきる土器
第 2 章　つかう
第 3 章　つくる
第 4 章　知る
第 5 章　かわる
第 6 章　うる、創る
第 7 章　地縁技術としての土器つくり

第 1 章では、ものつくりをめぐる先行研究についての検討と研究目的、調査地概要が述べられる。著者は学問的背景を、技術の人類学、民族考古学の流れに位置付けている。著者は、身体の動かし方や技術的行為が、個人が属する社会によって規定されていることを

見出し、「身体技法論」という研究テーマを創始した M. モースから先行研究の検討を始めている。モースの身体技法論を拡張し、技術活動を道具と身体動作の連鎖として捉えた A. ルロワ＝グーランの後に、P. ルモニエは、技術が社会的な産物であるという見方を主張した。ルモニエは人工物の製作について、社会文化システムや象徴的システム、人間の運動能力や認知構造までに視野を拡げた論を展開し、ものつくりからものつくりにおける社会関係へと視野を広げたとされる。技術の人類学的研究は、日本においては民族考古学において後藤明によって早くから紹介され、著者もこれらの影響を受けている。

先行研究を踏まえて、著者は研究対象であるアリの土器つくりの技術を、職人と素材の関係、土器を介した人と人との関係に応じた社会的な行為とする、「地縁技術（Community-based technology）[1]」として見る立場をとる。そのうえで職人個人の身体を分析の基礎とし、具体的には土器をつくる際の「指使い」という身体技法が分析の単位として措定される。この分析単位を用いて土器つくりという職人の生活実践を分析することで、技法の習得や変化を捉え、アリの土器つくりの特質をあきらかにすることが本書の目的とされる。

著者の調査地域は、エチオピア高原南端、リフトバレー西側の南オモ行政地域内に位置している。アリの人口は 1991 年のセンサスで約 11 万人である。アリの人びとはカンツァとマナの 2 つの社会集団に分けられ、カンツァに属する人びとは主に農耕によって生計を営み、マナに属する人びとは主に土器や鉄製品などをつくる職能民である。調査対象である土器をつくる集団はティラマナとよばれ、男性は原料や燃料の採取などに関わることはあるが、土器を製作するのは女性の仕事であるとされる。土器は主に調理用具として利用され、アリ社会における生活必需品であるという。婚姻はティラマナの集団のなかで行われ、土器つくりの技術を習得し、適齢期をむかえた女性職人は他村へと婚出し、定期市で土器を売って世帯の生計を担うようになるとされる。婚姻により、ある一定レベルの技術がアリ居住地域内を循環し、生活必需品としての土器の入手が保証されていると著者は述べている(173、以下本書からの引用はページ数のみ示す)。

第 2 章ではアリ社会における土器の分類、使い方、購入の仕方についての記述が行われる。土器は主に調理用具として 60 種類以上が使用され、形態により 4 つに呼び分けられ、特定部位の大きさによりさらに細かく識別される。土器の購入は定期市において利用者と職人の対面的なやりとりのなかで行われる。土器の評価基準は利用者、職人双方に共通し、良い土器の条件は丈夫であること、「マルキ」のある土器であるといわれる。「マルキ」のある土器とは、表面の美しさ、各部位の大きさが適切であることとされる。「マルキ」という民俗用語は利用者の身体や利用される状況に合わせた総合的な評価をあらわし、単一の基準をもつものではないと著者は述べる。ここから、利用者や職人が土器を評価する際に用いる「マルキ」という表現が、アリ社会において多様な土器を創出する背景にあることが論じられる（土器の評価とその表現の重要性は 4 章、6 章で後述される）。

第 3 章では手指の使い方を手がかりとして、職人間における土器の成形過程が比較検討される。土器の成形は粘土採取、土つくり、土器成形、乾燥、焼成の各過程からなる。この一連の過程において、粘土採取以外はすべて母親である職人とその娘のみが同じ作業場

[1] 地縁技術とは、生態人類学者である重田眞義（1996）によって提起された概念であり、地域内で入手できる素材を用いて製作し地域内のマーケットで流通されていることを特徴とし、地域にくらす人々の生活と密接な関わりを持った技術と定義される（18）。

所で作業を行い、職人同士が集まることはない。娘は土器つくりを母から学ぶ過程で特定の手指の使い方[2]を獲得するとされる。

著者は、自身が土器つくりを習得するなかで、それぞれの職人が土器のつくり方の独自性を主張すること、それぞれの職人の手指の使い方に独自の順序があること、決まった順番でなければ土器を完成することができない場面があることを発見した。著者はこの手指の使い方に注目し、（イ）使用する指、（ロ）指の動き、の二つの基準の組み合わせを「指使い」として命名、区分を行った[3]。さらに職人による動作名（「一つの指使い」または「指使い」の組み合わせ）の命名と身体動作の連鎖の結果である土器の形態の変化に着目し、「指使い」より上位の分析単位として「工程単位[4]」を設定した。「指使い」は、著者が土器つくりを分節化した単位である点でよりエティックなカテゴリーであり、これを基にした「工程単位」は、職人による動作名の命名によりそったよりエミックなカテゴリーであるとされる[5]。著者は双方を組み合わせて土器の成形過程の記述・分析を行った。その結果、「指使い」とそれを基礎とした「工程単位」は各職人に共有されているものの、「工程単位」の配列（＝土器を成形する際の順番）においては各職人のあいだで、また直接的に技術の伝承が行われる母－娘のあいだでも差異があることを、著者はあきらかとした。

既存のものつくりの身体技法研究では、技法の均質性や安定性の面が強調されることで、差異や変化を記述するための基準となる分析単位が同定されてこなかったと著者は指摘する。対して、「指使い」は身体動作を基盤とした分析単位であり、「工程単位」の配列は職人個人の生活実践や社会関係により構築されるという。「指使い」はものつくりにおける技法の差異や変化を関係論的に分析する単位として、重要性をもつと著者は論じている（これについては 5 章で後述される）。

第 4 章では、乳児から未婚の娘を対象として、彼女たちが土器つくりを「自分で知った」と語ることを手がかりに、職人が土器つくりの技法の基盤を獲得する過程が記述される。職人の娘たちは幼い時から土器を成形する母のそばで過ごし、母をまねて粘土遊びを行う。娘が土器を成形し始める頃になっても、母は積極的に娘の土器成形に介入することはなく、娘の試行錯誤を容認する立場をとる。反面、母は娘が特定の「指使い」を用いて、一定の順をおった成形段階で土器を成形しなければ、それは「遊び」であると表現される。娘たちが習得する土器の種類には順序があり、獲得をすすめていく際の判断は娘に委ねられている[6]。娘は試行錯誤を重ねることで、母や他の職人とは異なる順序で成形する土器の種類

---

[2] 土器の成形において道具はほとんど用いられず、表面を削るマメ科木本の鞘とヒョウタンの破片、成形途中の土器を置くエンセーテの葉が使われるのみである。必然、土器成形に際しての手指の重要性は高いと考えられる。

[3] （イ）使用する指は両手 5 本指に加えて、それぞれの指の関節単位までを記述している。（ロ）指の動きは、製作者からみて前後、左右、上下、斜め上下、時計回り、反時計回りなどである。（イ）（ロ）を組み合わせた「指使い」は少なくとも 20 種類を確認できるとしている（77）。

[4] 「工程単位」とは、第一義的には単独で用いられる一つの「指使い」が持続している時間的な区分のことであり、第二義的には職人によって動作名として表現される複数の「指使い」の連続体のことであると定義される（87）。

[5] ただし著者は「指使い」と「工程単位」を、著者による分類の仕方、職人による分類の仕方として論じ分けることは難しいとして、これに一定の留保をつけている（272）。

[6] 基本的には、はじめにブン・ティルとよばれる土器を成形できるようになってから異なる

を選択し、異なる手順で土器を成形するようになる。娘たちは自分で「土器つくりを知る」のである。結果として、つくられる土器の形態は同じでも、それをつくり出す技法には職人間で差異が生じることになる。このような技法獲得の仕方は、多様な技法の生成を許容するシステムとして位置付けられると著者は指摘する。このことは、「アーニ（手・つくり方）がちがう」という表現にあらわれると説明される。この表現は、土器の成形過程や土器の評価の際に、職人が他者との差異を主張する場合に用いられ、優劣の基準をつけるものではないという。アリ社会では土器成形の技法に現れる差異は肯定的に評価されるが、これは 2 章で述べた「マルキ」という民俗用語による、土器に対する評価の多様性と密接にかかわっていると著者は指摘する。

第 5 章では熟練職人のライフヒストリーとそれに関連した土器つくりの変遷史がまとめられる。著者はそれをテクノ・ライフヒストリーと名付け、その手法の有効性が検討される。既存の研究では、土器つくりに変化が生じる要因として、歴史的（伝播）要因や自然条件を要因とする環境決定論的な見方が多かったという。この見方では、つくり手の多様性や個別の社会関係、主体的選択による技法の変容が共通の技法へと移行する過程を十分に描き出すことはできないと著者は指摘する。対してテクノ・ライフヒストリーは、ものつくりにかかわる身体技法などの技術的要素と、個々のつくり手の生活実践とを関連させて検討する点に特徴があると著者はいう。つくり手個人の技法に差異が生じる背景、母から娘、その孫娘まで含めたテクノ・ライフヒストリーをつなぎあわせることによる世代間での継続した技法の変化、職人間で特定の技法が共通化されていく過程を描き出す可能性があると著者は論じている。

第 6 章では土器つくりの経済的な側面や土器を販売する場面に注目し、土器や土器つくりを評価する表現について記述される。それらを踏まえて、職人が土器つくりの創造性を発揮する背景が検討される。職人は土器を市で販売することで生活を成り立たせている。その際に重要となるのは、利用者による土器や土器つくりの評価であるとされる。「アーニがよい」という表現を、耐久性のよい土器をつくる職人に対して用い、その職人のつくった土器を好んで購入する利用者がみられたと著者は述べる。このような「アーニがよい」職人とその利用者とのあいだには、親族同様の関係性があらたにむすばれることがあるという。利用者は職人に希望する形態の土器の製作を依頼し、職人はこの関係性を尊重するためにあらたな形態の土器を（あらたな指使いや工程単位を用いて）創るようになると著者は論じる。

第 7 章では各章で述べられたことの総括が行われる。それを踏まえ、「アーニ」という民俗用語を手がかりとして、アリの土器つくりにおける特質について著者の解釈が提示される。「アーニ」とは、職人個別の成形技術の習得の仕方、習熟の度合い、生得的な才能、成形技術の独自性などの多義的な意味をもつ民俗用語であり、これを前提として職人間の技法の差異を肯定的に評価する表現であると著者は説明する。著者は、土器つくりという技術実践を職人個人の身体的能力のみで完結するのではなく、ものを介した人、自然環境、

種類の土器へ、小さな土器から大きな土器へと獲得がすすめられる。この土器種は用いる指使いの数、工程単位の総数などが比較的多く、他の土器に適応される技術の多くを含んでいるという点で、後から獲得する技法が少なくてすむという点を著者は指摘している（125）。

社会組織という要素の相互作用からなる社会的行為であるとしている。「アーニ」ということばは、これらの諸要素があらわれる場としての土器つくりにおける諸局面をむすびつけ、技法の多様性を保証することで、あらたな社会関係、土器、身体技法の生成に寄与していると指摘される。「アーニ」は単純な機能的説明や、因果論的な説明に還元できない、関係論的な概念として、アリの土器つくりの特質をあらわしていると著者は結論付けている。

評価・検討

以上の内容を踏まえて、ものつくりの民族誌的研究の文脈において本書が評価されるべき点は、大きく分けて 3 点あると評者は考える。

ひとつは技術についての人類学的研究を、土器研究というよりミクロな枠組みの中で、徹底的な数量化・分節化という調査手法を用いて行ったことである。各家庭をまわり、日常生活で使用される土器の数え上げと形態の測量、土器成形における手指の用い方の関節単位まで含めた分節化と計測、土器の焼成時間や温度の計測など、その詳細な記述は後の分析に強い説得力を与えている。

第二の点として、ものつくりの一連の過程を多面的に描き出したところにある。1 章ではアリの社会背景と生態的な背景を述べ、2 章では利用者の側から、日常生活における土器の使われ方が記述される。3〜5 章では製作者の側から、技法の習得と実践、社会状況や環境の変化を自身の経験として、自らの技法の変化とむすびつけて語る職人個人に着目した記述がなされる。6 章では製作者と利用者が交わる売り買いの場において、土器に対する評価が、双方の社会関係を変化させ、あらたな土器、土器つくりの技法が創造されることを指摘する。土器をめぐるコミュニティ（メンバー）内で生成、共有され、実践される技術システムとして土器つくりを捉えることで、技術を職人個人の身体行為のみにとどめるのではなく、もの・人・環境の連鎖関係として描き出すことに成功している。

第三の点として、「指使い」と「工程単位」という分析単位を用いて、土器つくりという技術実践の記述・分析を行ったところにある。それは身体と「もの」との関連性を技法の問題としてとりあつかう研究＝ものつくりの身体技法に関する研究が十分に進展してこなかった（12）ことを踏まえれば、ものをつくる際の身体の詳細な動きの記述を可能にする分析単位を生みだしたことは重要な貢献である。土器つくりのような、当該地域の社会的・文化的な文脈に組み込まれ、個々人の経験によって身体化され、言語化されない知識と技能によって成り立つ行為を調査する場合、さしあたりふたつの課題が提起されると評者は考えている。ひとつは対象となる地域の技術を記述・分析する際に用いられる分析単位の妥当性であり、もうひとつは言語化されない知識を記述・分析するための分析概念の妥当性である。前者については、調査者が直接その行為に参加、実践し、経験を共有することにより、自身を観察者であると同時に、情報を提供する被験者として位置付けるという手法がある。これにより創出されたエティックな分析単位である「指使い」と、エミックな分析単位である「工程単位」を組み合わせることで、著者は前者の問題を解決している。後者については、「アーニ」という民俗用語を分析に用いることで、アリの土器つくりにおける言語化されない知識・技能の特質について言及している。アリ社会では、職人間の技法の差異は、各職人の生得的な個性として理解され、詳細に言語化されることはない。つまり、実際には土器つくりにおいて職人のあいだで細かな技法の差異があるものの、この

差異が「アーニ」という民俗用語では十分に表現されていない。このことから、著者は技法の差異を民俗用語ではなく、「指使い」を基礎とした「工程単位」の配列という分析単位を用いることで――職人間の差異は「工程単位」の配列にあることをあきらかにして――言語化されない知識・技能を明示的に分析・記述することに成功している。

上記の手法を用いることで、著者はアリの土器つくりという言語化されない知識と技能によって成り立つ行為を明示的に記述・分析してきたが、アリの土器つくりの特質であるとされる「アーニ」という概念については、十分な検討がなされていないように評者には思える。著者は「アーニ」という民俗用語を、「明確に言語化できないような暗黙知にかかわる部分」であり（239)、「個別の職人による成形技術の習得の仕方、習熟の度合い、生得的な才能、独自のつくり方についての捉え方」（245）をあらわしているとし、それにより職人間で土器つくりの技法に差異があり、同じ手順を踏んで土器つくりを行なっても成功・不成功が生じるのだと職人たちは解釈していると述べる。そして、「アーニ」とは「単純な機能的説明や、因果論的な説明に還元できない、アリの人びとのあいだに特有な概念と考えることができる」（245）と指摘する。もちろん、ものつくりの技術はある種の暗黙知の領域を内包するものであり、「アーニ」ということばがアリの土器つくりの重要な価値観をあらわしているという点は首肯できる。しかし、この「アーニ」に対する説明は、エミックな視点によりすぎたものであり、「アーニ」というエミックな概念をとり出したあとで、それ自体に対するエティックな分析をより仔細に行う必要があったのではないだろうか。ことばと技術のむすびつきを考えるとき、「アーニ」という多義的な民俗用語の意味ではなく、「アーニ」ということばがある意義、それが実際の行為においてどのようにはたらいているかについての検討をさらにすすめるべきであったと評者は考える。このような視点からは、以下のような推論が可能になると評者は考える。

土器つくりに細かな技法がみられる一方で、それらの技法を細かに語る民俗用語がなく、「アーニ」という多義的な民俗用語によって一元的に土器が評価されることには、大きな落差があると評者は考える。言い換えれば、アリの社会には土器つくりの細かな技法が存在するものの、その詳細を述べ評価する概念群が存在しない。土器を評価する基準である「マルキ」という表現も利用者の状況やその時代の社会的な状況によって変化し、単一の基準をもたない。このことは、土器つくりの多様な技法の生成を許容するシステムとしてはたらいている（134-135)。技法の差異や、それによりつくり出された土器の差異が「アーニ」という多義的な概念で肯定的に評価されることによって、アリの土器つくりの多様性は保証され、再生産されている。それは逆にいえば、細かな技法レベルでの画一化が生じるための必要条件には、細かな技法を詳細に評価するより多くの民俗用語が必要になると推測される。さらに推論をはたらかせれば、技法や評価の基準が画一化されるには、土器が特定の目的――特定の権力者や特定の儀礼など――に向けて決定されることが必要になると考えられる。つまり、アリの土器についての評価が「アーニ」という民俗用語でなされている背景には、細かな技法を詳細に評価する民俗用語の必要性がなかったからといえないだろうか。実際にアリの社会で土器は主に調理用具（日用品）として使用されており、装飾はほとんどほどこされていない（35,40)。以上の推論からは、現在のアリの土器つくりにつながる技法の差異と土器の多様性が生じている遠因のひとつを指摘できるのではないだろうか。

おわりに

評者は、技術を記述するにはどのようにしたらよいのか、技術行為を行う身体の記述からいかなることが読み取れるのか、という多分に曖昧な問いを念頭に本書を読みすすめていった。このような観点からは、特に第 3 章を興味深く読むことができた。「指使い」という独自の分析単位を創り、それを基にして「工程単位」を設定し、それを用いて記述される土器成形の過程は優れて詳細である。この「指使い」という分析単位を用いることによって、土器つくりという身体技法の生成、実践、変化、創造といった動態を明示的に記述することが可能になる。この記述は土器という「もの」の動態の記述と直結しており、ここに身体とものの むすびつきを評価する「ことば」が加わってくる。著者の問いの根底にあったのは、「アリの職人はいったいどうやって土器をつくっているのか」であった。一見シンプルなこの問いを、著者は土器つくりの最小の単位である手指の動きに着目し詳細に記述することで、最終的に身体・もの・ことばの総合からなる土器をめぐるコミュニティの特質を描き出すところまで発展させている。ミクロの詳述からマクロの分析へと至るこのような手法が、ものつくりの身体技法研究の特徴であり最も面白いところであると評者は思う。今後著者には、膨大なフィールドデータを駆使しての、テクノ･ライフヒストリー研究の発展、本書では触れられなかった、土器つくりに関わる現代的な要素や外部からの影響との関連性、などについての研究をすすめていってほしいと思う。

参考文献

Shigeta,M.

1996 Wisdom of Ari: Community-Based Technology in South Omo, *Nile-Ethiopian Studies News Letter,* No3/4: 18-20.